

身体障害者の介助事故に関する研究

土 田 耕 司^{*1}

要 約

まちの中で障害者が見知らぬ人から介助を受けている時に、起こった介助事故について、障害者と介助者のアンケート調査をもとに検討した。

その結果、このような介助事故は少なからず発生しており、その対応としては、法的な判断に委ねるのではなく道徳的視点から、「お世話になった、善意の介助者に補償を求めたりしない。」という暗黙の了解があり、この暗黙の了解のもとに問題の解決がなされている。

さらに、まちの中での障害者の介助事故の防止やその対策について検討した。

はじめに

近年、ハートビル法の制定にみられるように、障害者にとって暮らし易くなってきている。さらに、まちづくりそのものにバリアフリーの考えが広げられ、まちづくり条例の制定などが盛んになってきた¹⁾。

しかし、障害者が誰の手助けも受けずに一人で外出ができるほど、まちの中の構造は整備されているとは言えない。そこで、障害者が一人で外出した時、見知らぬ人の介助を受ける場面が想定される。

もし、まちの中で障害者を見知らぬ人が介助をしている時、何らかの事故が起こった場合どうなるのだろうか。

そこで、アンケート調査をもとに、障害者と見知らぬ介助者となる健常者の双方から、介助事故について法的な対応に限らず、道徳的な視点からも検討をする。

調査対象者と方法

対象者は、車椅子使用の障害者で、病院や福祉施設に入院や入所していない社会的な自立生活をしている者75名に質問紙法による聞き取りのアンケート調査を実施した。

次に、介助者側と考えられる成人の健常者に質問紙法による自己記入式のアンケート調査を実施し191名の回答を得た。

なお、本調査において、介助者側に介助の動作をイメージしやすいように車椅子使用の障害者の介助

を想定した質問内容のアンケートとした。

まちの中での障害者の介助事故の実態

表1のアンケート結果1から、全調査者75名中85%の64名がまちの中で見知らぬ人から介助を受けた経験があると答えている。

この64名中70%の45名が、まちの中で見知らぬ人から介助を受けている時、「怖い」とか、「危ない」と感じたことがあると答えている。さらに、64名中

表1 アンケート結果1 (人・%)

問 1. まちの中で知らない人から介助を受けたことがあるか。			
1. ある	64 人	85 %	
2. ない	11 人	15 %	

問 2. 「問 1 で、1. ある」と答えた方に質問します。まちの中で知らない人から介助を受けている時、「怖い」とか、「危ない」感じたことがあるか。			
1. ある	45 人	70 %	
2. ない	19 人	30 %	

問 3. 「問 1 で、1. ある」と答えた方に質問します。まちの中で知らない人から介助を受けている時、けがや持ち物が壊れるなどの損害を受けたことがあるか。			
1. ある	8 人	12.5 %	
2. ない	56 人	87.5 %	

問 4. 「問 3 で、1. ある」と答えた方に質問します。その時、何らかの補償を受けましたか。			
1. はい	1 人	12.5 %	
2. いいえ	7 人	87.5 %	

*1 兵庫県社会福祉事業団

(連絡先) 土田耕司 〒650-0011 神戸市中央区下山手通5-7-18 兵庫県社会福祉事業団

12.5%の8名がまちの中で見知らぬ人から介助を受けている時、けがや持ち物が壊れるなどの損害を受けたことがあると答えた。

まちの中で見知らぬ人から介助を受けている時、けがや持ち物が壊れるなどの損害を受けたことがあると答えた障害者は、全調査者にすると約11%と高い数値であった。

車椅子使用の社会的な自立生活をしている障害者をアンケート調査の対象としているため外出の機会が比較的多く、まちの中で見知らぬ人から介助を受ける頻度も高く介助事故に遭遇しやすいといえる点を考慮しても、障害者がまちの中で見知らぬ人から介助を受けている時、けがや持ち物が壊れるなどの損害を受ける介助事故は少なからず発生している。つまり、介助事故は障害者にとって身近な生活問題といえる。

障害者の介助中に起こった事故

アンケートの問4で、まちの中で見知らぬ人から介助を受けている時、損害を受け何らかの補償を受けたと答えた1名の回答者の事例を紹介する。

<事例>

Aさん、50代の女性。車椅子生活者である。

Aさんは介助を受けて駅のエスカレーターを利用中に、介助していた駅員の介助ミスによる事故に遭い大腿骨の骨折で入院した。

この事故から、Aさんは好意的に障害者の介助をしてくれた駅員に責任を求めることを避けたい。次に、もしこの事故が公になるようなことがあれば障害者への介助やボランティア行為が受けにくくなるのではないかと思った。

身体障害者の更生医療制度により治療費の自己負担は必要ないが、Aさんの身体状況やけがの状態から入院時に個室を使用せざるを得なく、長期入院のため部屋代の費用が大きな負担となった。

そこで、Aさんは、けがによる慰謝料の請求でなく、入院に伴う部屋代の一部負担のみを求めて鉄道会社を相手に示談交渉を行った。鉄道会社の弁護士とAさんが話し合い、Aさんが介助の仕方を相手に十分に指示をしなかったとの過失相殺を行い、Aさんの過失度合いを差し引いた入院に伴う部屋代の一部を鉄道会社が負担することとなった。

この事例の場合は、介助者が鉄道会社の駅員であり、加害者側が駅を管理運営している鉄道会社であったことから、Aさんは介助事故の補償を求める気持ちになったと語っている。もし、相手が鉄道会社でなく善意の一個人ならば、Aさんは損害賠償を請求しただろうか。

法的判断

障害者の介助中に起こった事故を法的に考えると、介助事故での障害者と介助者の関係を、交通事故での運転者と同乗者の関係に当てはめて考えることができる。自動車の運転者の過失で交通事故を起こし、同乗者に損害を与えた場合、好意（無償）同乗で自動車に乗せてもらうことは同意したが、事故を起こすこととは別であるから法的に損害賠償が認められる²⁾。介助事故についても同じ事がいえ、障害者は介助をしてもらうことを同意し、介助の行為においては好意（無償）ではあるが、損害を与えられたこととは別であると考えられ、法的な損害賠償が認められる。

類似した判例をもとにして考えると、津地裁昭和58年判決（ボランティア裁判と呼ばれているもの）をあてはめることができる。この判例は、子供会のハイキングでの川遊びで、児童が溺死し、引率にあっていたボランティアに対して損害賠償金の支払いが命じられた。ボランティア活動という道徳的に良いことをしたとしても、過失が生じ他人に対して損害を与えた場合は、損害賠償の責任が成立している³⁾。このことは、まちの中で障害者を善意で介助をした場合に起こった事故についてもあてはめて考えることができる。

さらに深く法的に検討する必要があるが、法に従い処理を求めると、過失により他人の権利を侵害した場合に他ならず、民法七〇九条による損害賠償の責任があると判断できる⁴⁾。

このことは、介助を受けている障害者側にもあてはめることができる。たとえば、介助を受けている障害者に、何らかの過失があって、介助者がけがをするなどの損害を受ければ、過失により他人の権利を侵害した場合に他ならず、民法七〇九条により、介助を受けている障害者に損害賠償の責任があると判断できる。

善意の狭間

表2のアンケート結果2から、介助者にまちの中で見知らぬ障害者を介助している時、損害を与えたら補償をするかとの問いに対しては「しない」の2%に対して「する」と答えた回答が59%もあったことは、相手に、何らかの過失を与えれば補償することは社会通念上の常識である。しかし、39%もの「わからない」との回答があることは、相手に、何らかの過失を与えれば補償するのが社会通念上の常識であることはわかっているが、「善意で介助を受けている時、障害者の過ちで損害を与えたとしても、補

表2 アンケート結果1 (人・%)

問5. (介助者に質問)		
まちの中で、見知らぬ障害者を善意で介助をしている時に、損害を与えたら補償しますか。		
1. する	112人	59%
2. しない	4人	2%
3. わからない	75人	39%

問6. (障害者に質問)		
まちの中で、見知らぬ人から善意の介助を受けている時、介助者の原因で損害を受けたら、その介助者に補償を求めますか。		
1. 求める	5人	8%
2. 求めない	28人	37%
3. わからない	42人	56%

問7. (介助者に質問)		
まちの中で、見知らぬ人から善意の介助を受けている時、介助者の原因で損害を受けたら、その介助者に補償を求めますか。		
(自分が障害者になった気持ちで答えて下さい)		
1. 求める	16人	8%
2. 求めない	87人	46%
3. わからない	88人	46%

償などを求めたりしないだろう。」という気持ちの現れではないだろうか。

このことは、損害を受けた障害者が補償を求めるかの問いに対しては、「求める」と答えた者は7%で「求めない」の37%の5分の1以下であった。また、介助者となる健常者に同じ質問で、「自分が障害者になった気持ちで答えて下さい。」としても「求める」が8%で「求めない」の46%と同じような数値がみられたことは、障害者も健常者も変わりなく介助者には補償を求めたりしないという社会全般的な考え方からであろう。

社会全般の考え方として「お世話になった、善意の介助者に補償を求めたりしない。」といえる。しかし、「わからない」との回答が多い点については、その時に遭遇しなければ判断しにくいという心の現れと、介助行為は介助する側とされる側の両者の関係で成り立っていることから、一方側の考え方で判断し難いからであろう。さらに、この点について

は今後に検討の課題が残される。

まちの中で見知らぬ障害者を介助することは、道徳的に良い事をしたとしても、何らかの事故が発生すれば法的には損害賠償の請求ができる。しかし、社会の常識として、まちの中で善意の介助をしてもらった人を、障害者が損害賠償を請求するなどの法的措置を取るだろうか。そこには、法的な判断には委ねることができない当事者の道德観に支配されるところがあると考ええる。

おわりに

まちの中で見知らぬ障害者の介助から起こった事故は、当事者の判断に委ねられるところである。「お世話になった、善意の介助者に補償を求めたりしない。」という暗黙の了解があり、この暗黙の了解のもとに問題が解決されている。そこには、法的に判断することができない微妙な領域が残されており、その判断に至る過程には計りし得ない複雑な心の葛藤があるに違いない。

アンケート時に「介助事故をなくすにはどうしたらよいか。」と、記述式で問うと、①社会に対して、まちの中での構造面のバリアフリー化の推進。②介助者に対して、障害者への介助に慣れること。③障害者に対して、介助の受け方や介助者に自分の介助の仕方を的確な指示ができること。以上の、3つの回答に要約できた。

最後に、筆者は善意の介助時に起こった事故について、当事者間の問題として片付けられるのではなく、社会全体の問題と考えて公に議論する機会を持つことを求めたい。

介助事故の問題を論ずることは、障害者がまちの中での善意の介助やボランティアが受けにくくなるのではないかとの考えもあるが、それよりも、まちの中での介助事故を通して、障害者問題が一部の人の問題ではなく社会全体の問題として捉えることこそが、本当の問題の解決策に繋がるのではないかと考える。

文 献

- 1) 齊場三十四(1999) バリアフリーの社会構造. 明石書店, p190.
- 2) 平山信一編(1993) 損害賠償の法律全集. 自由国民社, pp198-199.
- 3) 橋本勇人(1998) ボランティア活動中の事故と法責任. 旭川荘研究年報29-1, p45.
- 4) 高梨公之, 倉澤康一郎編(1989) 図解による法律用語辞典. 自由国民社, pp287-288.

Study of Accidents that Occur When Caring for Physically Handcapped People

Koji TODA

(Accepted Jun. 7, 2000)

Key words : THE ACCIDENTS IN ASSISTANCE, GOOD INTENTIONS, COMPENSATION

Correspondence to : Koji TODA

Hyogo Prefectural Social Welfare Corporation

Kobe, 650-0011, Japan

(Kawasaki Journal of Medical Welfare Vol.10, No.1, 2000 171–174)